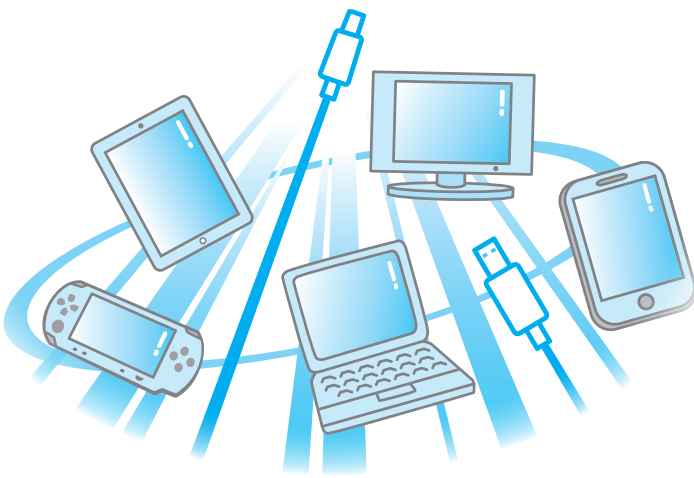


# 欧州ICT社会 読み解き術



## ICTでボランティア…の巻

「東日本大震災」からの復興・再生に向けた取り組みの中で、私たちは、絆や支え合いを再認識している。筆者が住むスイスにいても、日本でのボランティア活動の広がりなどが見てとれるようだ。ところで、一般的にボランティアと言うと、人的支援や物資・資金の提供などを想像するが、今回、筆者が紹介するのは、あなたがパソコンを使っていない間、どこかの国の誰かに、あなたのパソコンを貸すというもの。ところが、物理的に貸与するのではないというから、何だか、話が複雑に聞こえるではないか。



栗崎 由子

### 日本に変化のうねり

二〇一一年は、日本にとって、「東日本大震災」とそれに伴う原発の事故により、歴史に残る年となった。石油を輸入に頼る国が、原子力にも頼れないと知り、しかも津波、猛暑、台風という自然災害の危険と共に経済発展を支えていかなければならないことを、再確認させられた。日本は、従来の経済、産業、生活のあり方すべてで、発想を転換する時期にきている。

日本の変化のうねりは、遠くヨーロッパからも見てとれる。「東日本大震災」の後、多くの日本人は、「自分ができることをしよう」という気持ちを強く持つようになったようだ。「絆」が、昨年の国民的キーワードになったように。人が一人称でモノを考える時、変化が起きる。現に、日本でも被災者支援や被災地復興のために、多数のボランティア活動が誕生している。

さて、ICTを使う人々が、日本や、もっと広く人類のために個人でできることをするとしたら、何があるかと考えた時、BONIC

### Cのことが閃いた。

パソコンをバーチャルに集積

BONICとは、Berkeley Open Infrastructure for Network Computing（バークレー オープン インフラストラクチャ フォー ネットワーク コンピューティング）の略語である。日本語ページも充実してきているので、もっと深く知りたい読者は、BONICのホームページ (<http://boinc.berkeley.edu/>) を参照願いたい。

BONICとは、あなたがパソコンを使わない時に、あなたがパソコンに社会貢献をさせることを可能にするシステムである。

と言っても、多くの読者には「？」だろう。そこでもう少し噛み砕いて説明したい。

パソコンは、人が使わなくても、電源が入っている間、スクリーンセーバーが作動している。

つまり、パソコン内部では、スクリーンセーバーを動かすために、演算処理が行なわれているのだ。

その演算処理能力を世界中から何千何万台分集めて、大きな計算

をさせるのが、BONICというソフトウェアのチカラだと思っていただきたい。世界中にある膨大な数のパソコン、その力を何千何万台分集めると、スーパーコンピュータ（スパコン）を上回る演算能力となる。

一台のスパコンに膨大な量のデータを集めて複雑で大きな演算をさせるのではない。演算式を細分化し、無数のパソコンに送り込む。その結果として大きな仕事を達成する。発想の逆転である。

### 科学を市民の手に！

BONICは現在、マラリア感染過程の解明（スイス熱帯医学研究所）や、天体の謎の解明（カリフォルニア大）など、人類に役立つ科学研究に多用されている。このような研究には、膨大な演算が必要になる。BONICを使う科学者はその演算ジョブを細分化し、個々のボランティアたちのパソコンに送り込む。演算の結果は、その科学者の手元にあるサーバーにパソコンが送り返す。そのパソコンが、まだ暇な場合は、さらに次

のジョブが送り込まれる、という具合。ボランティアたちのパソコンと科学者のサーバーを繋ぐのは、インターネットである。

このような、演算形態（ディスプレイ）自体は新しくない。現在も、一つの企業内や、共同研究を行う研究所といった、あらかじめ決まった、閉じた集団の中で多用されている。

だが、BONICの画期的なところは、自分のパソコンを使って、も良いよという無数の市民ボランティアを、科学研究のために広く巻き込んでいるところだ。BONICが、ボランティア・コンピューティングとか、シチズン・コンピューティングと呼ばれる所以だ。「科学を市民の手に！」である。

### コンピュータ利用を平等化

このような仕組みを持つBONICには、社会的にも革命的な意義がある。それは、コンピュータ利用の平等化である。

今まで、科学者や、研究機関はスパコンを利用したければ、高額

なお金を払って自ら購入するか、またはそれを持つ他の機関に借りるしかなかった。ここに、いやおうなく、持つものと持たざるものとの間に、何らかの差の生じていたことは、想像に難くない。

ところが、BONICを使うと、誰でも低コストでスパコン同様の機能を利用できる。BONICソフトは無料でダウンロードでき、パソコンの演算能力はボランティアが無料で提供。つまり、研究予算の乏しい開発途上国の科学者や、研究所内のルールにより、スパコンをおいそれとは使えない研究者たちが、自分たちのスパコンを手にするようなものだ。

パソコンの持ち主である市民ボランティアにとっては、BONICは時間もお金もかからない社会貢献となる。自分が何もしない時に、パソコンが働いてくれるのだから。

### 参加の動機はさまざま

BONICに参加する人々には、さまざまな動機がある。筆者の調査したマラリアプロジェクトの場

合、技術が好き、医学の進歩に関心がある、という理由の他に、自分の体験からマラリア患者とその家族の苦しみが分かるから、という動機で参加した人も多かった。

前述の調査から、彼、彼女らは、BONICに参加した動機は違っても、同じクラブに入った者同士、横の繋がりを求めていることが分かった。これは、人が実際に行なう通常のボランティア活動と同じではないか。BONIC参加がきっかけになって、ボランティアたちがリアル世界でも気持ちの通じる仲間を増やしてほしいと思う。

.....

栗崎由子（くりさき よしこ）  
一九七八年、日本電信電話公社入社。先端技術の商品化、市場調査等を担当。パリの経済協力開発機構（OECD）、SITA（航空会社間の世界規模データ通信会社）で、情報通信政策や市場戦略調査担当。現在は独立コンサルタント。ボランティアとして、BHNテレコム協議会ヨーロッパ代表。関心領域は、ICTと人・社会・産業との相互関係、情報化社会のCSR。ジュネーブ在住。

yoshiko@geneva-kuritsaki.net